

関東管領・山内上杉憲房もまた、伊勢氏の台頭を警戒した。大永元年に武蔵の豪族・毛呂佐渡守頭重が伊勢の軍門に下ると

「相模のみに留まらず、このままでは武蔵さえ奪われる。もはや綺麗事は、問うまじ」
そう決断した。

そして、関東管領山内上杉家と古河公方家は、睨み合うこととなる。

このとき古河公方・足利高基を支援したのは、伊勢氏綱である。山内上杉氏が古河公方と一戦に及ぶのは、つまりは、そういう背景ゆえのことだ。

この機にあたり、足利高基の嫡子・晴氏のもとに伊勢氏綱の娘が嫁した。のちの芳春院である。

伊勢氏の台頭を忌む者たちは

「伊勢の素浪人」

という侮蔑でこの一族を卑下した。

しかし、もともと伊勢宗瑞は室町幕府用人に通じる出自だ。足利晴氏に嫁した娘とて、生母は関白太政大臣・近衛尚通を父に持つ。上杉家が吼えたところで、勝ち目などないまでの綺麗、これは身分卑しき出自ではない。

古河公方家が上杉から伊勢へと頼る先を変えたところで、不思議などないのである。

しかも血統など意味のない戦乱にあつて、伊勢氏は上杉家に取って代わる実力者であった。こればかりは、否定の仕様もない。

つまり、このときにおいて、足利家は完全に上杉家を見限ったといってもよい。

その伊勢氏が、突如改姓をしたのは、大永三年（一五二三）六月一二日から九月二三日の間とされる。

改姓により変わった氏は（北条）である。これは鎌倉幕府執権に肖ったもので、つまりは、古河公方を補佐することを宣言するに等しい。

しかも関東の豪族の耳に響くのは、聞き慣れぬ（伊勢）よりも、古えゆかりの（北条）であることは間違いない。また、日本史上最も低い

と言われる四公六民の税制という響きも、民衆にとつて魅力にくすぐる。

鎌倉幕府を彷彿させる執権と同じ（北条）という姓を名乗る。

戦わずして関東の民の心を掴む術といつても過言ではない。

上策か、下策か。

その詮議はどうでもいいことだった。

確かなことは、その改姓ひとつで、関東に与える影響が大きいということなのだ。

この北条氏綱と小弓公方・真里谷信保が、やがては決別するのは道理といえよう。武蔵国を狙っていた氏綱は、あわよくば上総も伺おうとしていた。

この流れに里見氏が巻き込まれていくのも、また道理であった。

大永四年（一五二四）正月。

北条氏綱は扇谷上杉家臣の太田六郎左衛門尉資高を寝返らせ、江戸城を奪った。このことが、上総方面への緊張につながったのは云うまでもない。

太田資高は太田道灌の孫に当たる。

かの暗殺に及んだことは、主従の正義に反する不義として、資高は長い間、ずつと扇谷上杉氏を恨んできた。これに付け入ることは、戦国の做いとして当然のことといえる。

太田道灌がその父・道真と構えた武蔵国三天堀点のひとつが、江戸城だった。北条氏綱はこのうちの一つを、労なく手に入れたことになる。

河越城へ撤退した扇谷上杉修理大夫朝興は起死回生を図り、真里谷信保との同盟を画策した。

その結果、北条氏と小弓公方勢力は手切れとなつていくのである。

さて、この年八月、里見義豊は大井大明神の修繕を行った。大旦那の名義は義通であるが、普請は明らかに義豊に相違ない。

「普請は人に喜ばれる。気分がいい」

義豊はそういつて笑った。病床の義通を見舞い、同様の言葉を吐くと

「同感だ」

父と子は、久方ぶりに笑みを共有した。

そして、この修繕が、義通の名が後世に伝わる最後の記録となる。恐らくはこの年、里見義通はこの世を去ったのだろう。

里見義豊の時代が、名実ともに始まろうとしていた。

十
十
十

賢使君（4）

夢酔 藤山